

青森県立郷土館企画展

# 青森の風土と人

鎌田清衛写真展



〈会期〉

令和2年

9月4日(金)

会期中  
無休

~10月18日(日)

〈会場〉青森県立郷土館 大ホール

〈開館時間〉9:00~18:00まで



主催：青森県立郷土館

共催：東奥日報社

後援：青森県写真連盟

## はじめに

鎌田清衛（1926～2016年）は、国鉄に勤めるかたわら、津軽を中心とした青森県の農村・漁村の風土と、そこに暮らす人々の姿を数多く撮影した写真家です。県内外のコンテストでの受賞作を多数持ち、青森県文化賞・青森県褒賞を受賞、青森県写真連盟会長を務め、県内のアマチュア写真界の中心的人物でした。

今回展示する鎌田の作品は、平成30年にご遺族から当館に寄贈されたものです。その中には、個展や各種展示会等に出品した作品をはじめ、昭和30年代の青函連絡船や青森駅の写真、民俗行事、津軽平野を中心とした県内各地の風景など、多彩な作品が含まれています。

当館では、これまでも青森県の風景や人々の暮らしを記録した写真を数多く収集・紹介してきましたが、鎌田が撮影した写真は、そのなかでも珠玉の作品群といえるでしょう。展示された作品を通じ、青森県のなつかしく、美しい風景を堪能し、本県の素晴らしさを再発見する機会としていただければ幸いです。

本展の開催に当たり、ご遺族、青森県写真連盟の皆様をはじめ、ご協力を賜りました各位に対し、御礼申し上げます。

令和2年9月

青森県立郷土館

館長 大館 利章

### 謝辞

本展の開催にあたり、鎌田清衛氏のご子息である鎌田啓一氏、および、青森県立美術館の高橋しげみ氏には資料の提供をはじめ、ご助言・ご協力いただきました。また、その他多くの方々にもご協力いただきました。心より感謝申し上げます。

### 協力者（順不同・敬称略）

青森県写真連盟 鎌田啓一 高橋しげみ 芦名公雄 伊藤俊幸 神秀次郎  
木村司 増田哲友 佐藤正治

### 〔凡例〕

- ・本書は、令和2年度青森県立郷土館企画展「鎌田清衛写真展『青森の風土と人』」[令和2年9月4日(金)～10月18日(日)]の解説書である。
- ・本書は展示作品の全てを収録したものではない。また、作品の配列は展示の順序と一致しない。
- ・本書に掲載の写真は複写撮影したものである。
- ・本書の編集・執筆は、当館歴史分野の学芸主幹・佐藤良宣、および研究主査・滝本敦が担当した。

### 表紙写真解説

- 上 青森駅前広場から北の連絡船岸壁方向を見た様子（昭和30年代前半〈1950年代後半〉頃か）  
…青森駅本屋の北側にあたる場所。左手の建物のうち、右側に突き出た部分は、旅館・タクシー案内所。正面奥には、接岸中の青函連絡船の4本の煙突と煙がかすんで見える。右手奥の建物は、当時の国鉄バス青森駅。この建物のあった場所は、現在道路の一部になっている。
- 中 「村の獅子舞」（昭和43〈1968〉年アサヒペンタックス「日本の祭典」コンテスト 金賞）4枚組写真のうちの1枚  
…青森市荒川地区。獅子踊は地区内の上野に伝わっていたもの。
- 下 「餅まきの日」（昭和61〈1986〉年 尾上町（現平川市）猿賀）「津軽 土と人」とより

## 第1章 写真家鎌田清衛

鎌田清衛は、大正15（1926）年に青森県南津軽郡大杉村（のちの浪岡町。現 青森市浪岡）に生まれた。彼が写真を撮り始めたのは、旧制中学校の頃、兄のカメラを譲り受けて以降のことだという。その頃彼が使用していたカメラはドイツ製の35ミリカメラ スーパーネッテルであった。当時は物資に乏しい戦時中の時期であったので、「35ミリフィルムを入手するのが容易でなく、レントゲンフィルムを使用した思い出がある。」と鎌田は書いている。

鎌田は、中学校および官立中央無線電信講習所を卒業し、青函連絡船の無線通信士としての職を得た後、昭和25（1950）年頃に青森市で活動していた写真家の団体である北陽会ほくようかいに参加した。

北陽会は、青森市大町（現 本町五丁目）で写真材料店を営んでいた小島平八郎こじまへいはちろうが大正11（1922）年に結成した団体で、会員の作品はいつも大きなコンクールや展示会で入選していた。この会の毎月の例会は、小島宅の座敷で行われたという。

ここで、鎌田は写真家の小島一郎こじまいちろう（1924～1964）と出会った。一郎は、平八郎の長男であり、北陽会に入会したのは昭和29（1954）年のことであった。そのあと、昭和30年代初め（1950年代半ば過ぎ）に一郎は津軽地方などへの撮影旅行を始めた。この旅行に、鎌田は休みのほとんどを費やして、度々同行するようになった。撮影前日には、一郎と夜遅くまで飲み、毎回のように青森駅から弘前行きの一番列車で出発、川部

で五能線に乗り換え、西北津軽方面に向かったという。撮影地は天候次第で金木方面かなぎにするか、木造近郊きづくりで済ませるかが決められ、駅で降りてバスがあれば乗車して撮影場所を探した。撮影は晩秋から冬にかけてが多く、地吹雪によく遭遇したという。この時鎌田が撮影に用いたカメラはCanon IV Sbであった。この一郎との撮影行を繰り返した数年の間で、その後何十年も撮影活動を続ける意思と技術を獲得したとも言われる。鎌田にとって一郎は「飲み仲間であり師」であった。鎌田は、生涯津軽平野を撮り続けたが、その理由は、一郎と「津軽を語り、撮り続けているうちに自分がすっかり虜とりこになってしまったからである」と書いている。一郎はその後の青森県内の写真家に大きな影響を与えたが、鎌田が最も強い影響を受けたことは想像に難くない。

この頃の作品の一部は、後に個展「津軽 土と人」「津軽断章」などで発表されているほか、コンテスト受賞作や写真雑誌に掲載された写真等がアルバム2冊に収められている。

本章では、今別いまべつ小学校関口分校で撮影された一連の写真と、そのアルバムに収められている写真のうち、主要なコンテストでの受賞作などを紹介する。



津軽の夜の旋律  
（昭和35〈1960〉年出品）



分校のこどもたち（今別小学校関口分校にて）  
（昭和34〈1959〉年出品）



打毬  
（昭和37〈1962〉年出品）

## 第2章 鎌田が切り取ったふるさとの姿

本章では、個展「津軽 土と人」「津軽断章」「津軽風韻」の作品と、それ以降の展示会に出品した作品等を紹介する。

鎌田は、昭和の末から3回の個展を開いている。そのうち、まず2回を紹介する。

### ○「津軽 土と人」

【会期】昭和62(1987)年3月27日～29日 【会場】青森市民美術展示館

昭和30年から60年頃にかけて、津軽地方を中心とした青森県内で撮影した農漁村の風景などのモノクロ写真50点を展示。展示した写真は、鎌田が選んだ写真を写真家の小久保善吉がさらに絞り込んで選定したものである。鎌田は同展で配布されたリーフレットのなかで「意図して選んだ訳でもないのに、結果的に秋と冬の写真が大半をしめてしまった。」と書いているが、とくに冬に撮影された写真が多い構成になっている。

なお、展示作品の一部は、前年の『アサヒカメラ』昭和61(1986)年11月号に掲載されたものである。このことをきっかけにして、写真展開催の勧めがあったという。リーフレットには、前述の小久保善吉とアサヒカメラ編集部が文章を寄せている。

また、この写真展に寄せて、写真仲間である向井弘(1931～2003)が書いた新聞での紹介記事では、「月光のバライタ紙を使った仕上げは、諧調が豊富でしまりが美しく、斬新なマットパネルとよく調和して、格調高い仕上がりになっている。」と、写真パネルの仕上がりを賞賛している。

今回の展示では、当時のパネルの状態のまま展示している。

### ○「津軽断章」

【会期】平成5(1993)年3月5日～7日 【会場】青森市 青森県観光物産館アスパム

【会期】平成5(1993)年3月18日～20日 【会場】弘前市 NHKギャラリー(NHK弘前放送会館内)

同展では、前回の「津軽 土と人」の写真に加え、この展示会までの間に撮影された強く印象に残った写真・好きな写真を展示している。写真の選定にあたっては写真家の大山謙一郎が協力、写真集の編集・構成は向井弘などが協力した。展示した写真は「津軽 土と人」同様、冬の写真が多くを占めており、そのうち37点を収録した写真集も制作されている。

2回の個展のあと、平成6(1994)年の5月から12月にかけて、鎌田の写真と文章を取り上げた『北の風彩』という連載記事が東奥日報の土曜の夕刊に31回にわたり掲載された。綴られている文章の多くは掲載された写真に関する話題であるが、なかには鎌田の被写体や撮影地に対する思いを述べた部分もある。

まずは、被写体について触れた部分を紹介する。



牛瀧 1956  
(昭和31<1956>年撮影「津軽断章」)



山界幽玄(平成5<1993>年出品)

(前略) テーマを持たない人は写真がうまくならないかと言うと、そうとは言い切れない。(中略) たまの休みには、あれこれとイメージをふくらませて、張り切って出かける。自分のイメージに合った被写体に巡り合おうものなら、興奮してシャッターを切って写真の楽しさを味わう。

中には「愛用のカメラのシャッター音を聞くだけでも、自然との融和が図れるんだ」と言う人さえいる。(中略) この場合、特にテーマを意識していないが、好きな被写体を選んだことだけは確かである。(6月4日)

被写体は、どこにでもあるのだが、見慣れすぎると、よく見えてこないことがある。特に写真に適した素材があるわけではない。「カメラで切り撮ったから面白い」という被写体を探すのだが、特別なものには、めったに巡り合わない。(9月17日)

ありふれた被写体の中から、自分の心に深く浸透したものを撮ったにすぎない。すべてを忘れて、対象に打ち込む姿勢が、作品を生む原点だといわれる。イメージしたものが、見事に表現されたときの喜びは、長く撮り続けて得られる喜びだ、と思っている。(12月24日)

この頃、鎌田は初心者向けの写真教室で指導をしており、いつもの指導の言葉は「自分が、何を撮りたいか、そのイメージを大切に」であったという(朝日新聞青森版 土曜サロン 平成5<1993>年2月20日)。鎌田も日常の風景のなかから、自身が感銘できるような被写体を選び出して撮影することを通じ、意図したものを表現している様子がうかがえる。

次に、撮影地について、鎌田の考えが表れている部分を紹介する。

私は、県内すべて撮影地だと思っている。だから、地元撮影で日帰りコースをたどることが多いが、「この場所は絵になるなあ」と思うと一回だけでなく、季節、時間を変えて何回か撮影を繰り返す。(7月9日)

岩木川に沿って、十三湖までのコースが好きで、よく撮影に出掛ける。津軽の風土感の強い地域を重点的に回るのだが(後略)。(7月23日)

この記述からは、鎌田が青森県全体を撮影場所として考えており、なかでも、小島一郎と数年にわたり撮影して歩いた津軽平野に対する非常に深い思い入れが感じられる。

鎌田の3回目の個展は「津軽断章」から13年後に開催された。

## ○「津軽風韻」

【会期】平成18(2006)年4月14日～16日 【会場】青森市民美術展示館

同展では、西北津軽で撮影された色鮮やかなカラー写真40点が展示された。冬の写真が多くを占めた以前の個展とは違い、「津軽の里が囁いているような、もの静かな作品」が選ばれている。同展あいさつ文で鎌田は「しかし、津軽は私からだんだん遠ざかっていくような気がしてなりません。」と書いているのが印象的である。

その後も、鎌田の作品は、青森県美術展やニッコール展などで展示された。

晩年になると、カラーの作品が主となり、色鮮やかな花などを題材としたものも多くなるが、その一方で、民家や洗濯物など、昔から撮影してきたものを被写体とした作品も少なくない。

鎌田が最後に手掛けた作品は、平成26(2014)年に撮影した4枚組の作品「SL 銀河の旅」である。この作品は、彼の没後間もない平成28(2016)年6月、「第1回フォト遊光 写真展」で展示された。

### 第3章 ふるさとの記憶

本章では、津軽を中心にして撮影した数多くの写真のなかから、なつかしいふるさとの姿、昔の生活や習俗、歴史的な出来事、民俗行事などの写真を紹介する。

鎌田は、昭和20年代半ばに流行したリアリズム写真運動の影響を受け、郷土の風土やそこに生きる人々の姿を数十年にわたって撮影してきた。それらの写真は時を経て、歴史的な記録となった。

当館に寄贈された写真には、これまで述べた展示会・コンテストに出品された作品のほかにも、数多くのネガフィルム・スライド・写真がある。そのなかには、彼の職場にほど近い、青森駅周辺で撮影されたものが数多く存在する。青函連絡船で津軽と北海道を行き来した「担<sup>かつ</sup>ぎ屋」と呼ばれていた行商人をとらえた多くの写真のほか、昭和39（1964）年の東京オリンピックの際に青函連絡船 津軽丸を使って行われた聖火輸送の様子、昭和43（1968）年の十勝沖地震で被災した青森栈橋待合室の被災状況の写真等も含まれている。



やすかた  
安方の岸壁からみた洞爺丸型連絡船（昭和30年代）  
とうやまる



おおかわら  
大川原の火流し（昭和58〈1983〉年頃か）



昭和43（1968）年 十勝沖地震で被災した青森栈橋待合室内部



雪国の子供（昭和60（1985）年二科会写真部東北公募展 入選作品）

#### 鎌田清衛 略歴

大正15（1926）年5月18日 青森県南津軽郡大杉村（のちの浪岡町。現 青森市浪岡）に生まれる。

青森県立弘前中学校（現 弘前高等学校）・官立中央無線電信講習所（現 電気通信大学）を卒業後、昭和20（1945）年頃、青函連絡船海岸局の無線通信士となった。国鉄では青森電務区等で勤務。東北鉄道学園主任講師、青森情報区長等を歴任。昭和57（1982）年、千歳電気工業（株）青森営業所長となった。平成28（2016）年5月21日逝去。

#### 【主な写真関係履歴】

昭和33（1958）年	東奥サロン年度賞 第1位
昭和39（1964）年	日本を世界に紹介する写真コンテスト 特選
昭和43（1968）年	アサヒペンタックス「日本の祭典」写真コンテスト 金賞
昭和45（1970）年	アサヒペンタックス 第2回世界写真コンテスト 入賞
昭和62（1987）年	個展「津軽 土と人と」を開催
同 年	NHK文化センター弘前教室講師となる（～平成8（1996）年）
平成5（1993）年	個展「津軽断章」を開催。同名の写真集を出版
平成8（1996）年	第38回青森県文化賞受賞
同 年	NHK文化センター青森教室講師となる（～平成17（2005）年）
平成11（1999）年	青森県褒賞受賞
平成12（2000）年	勲五等瑞宝章受章
平成18（2006）年	個展「津軽風韻」を開催

#### 主要参考文献

- ・「鎌田清衛写真展 津軽 土と人と」個展リーフレット 昭和62（1987）年
- ・向井弘「津軽の風土 風俗を活写 鎌田清衛写真展に寄せて」（東奥日報 昭和62（1987）年3月27日）
- ・「津軽の風土を撮り続け40年 県写真連盟の鎌田清衛会長 初の写真集を来月自費出版」（朝日新聞青森版 平成5（1993）年2月20日）
- ・鎌田清衛「美を求めて」（東奥日報 平成5（1993）年2月23日・3月2日夕刊）
- ・鎌田清衛『津軽断章』〈写真集〉平成5（1993）
- ・鎌田清衛「北の風彩」（東奥日報 平成6（1994）年5月7日～12月24日の土曜夕刊に連載）
- ・『あおもり草子』通巻第87号 特集：小島一郎風韻遍路 平成6（1994）年11月25日 企画集団ぷりずむ
- ・『小島一郎写真集成』平成21（2009）年 インスクリプト
- ・「90歳で先月急逝 鎌田清衛さん 元県写真連盟会長 きょうから作品展 津軽撮り続けた生涯」（東奥日報 平成28（2016）年6月3日朝刊）



芦屋 1986 (昭和 61 <1986> 年撮影「津軽断章」)



繁田 1970 (昭和 45 <1970> 年撮影「津軽断章」)

令和2年度企画展 鎌田清衛写真展「青森の風土と人」解説書

編集・発行：青森県立郷土館

〒030-0802 青森市本町二丁目8-14 電話 017-777-1585

発行日：令和2(2020)年9月4日

印刷：ワタナベサービス株式会社

〒030-0803 青森市安方二丁目17-3 電話 017-777-1388